

秋田、青森、岩手の支援団体

「被災地を忘れない」とメッセージ



「支援の振り返りと今後の展開を見据えて」をテーマに意見を交わす、秋田、青森、岩手の支援団体の代表

「まだ何かできるはず」

蜘蛛の糸
佐藤理事長

「被災地を忘れない、支援の振り返りと今後の展開を見据えて」をテーマに、秋田県のNPO法人蜘蛛の糸（佐藤久男理事長）主催の「被災地支援シンポジウム」が9日、釜石市のシープラザ釜石で開かれた。県内でさまざまな支援活動に取り組む3団体の代表が被災地の現状を報告。青森、秋田両県の支援団体関係者も加わり、「震災を風化させてはならない」とメッセージを発信した。

震災後、NPO法人遠野まごころネットで支援活動に取り組む黒住忠雄さんは「故郷の岡山や東京などでは、震災は忘れ去られようとしている。風化をいかに止めるか。今年はこのテーマで活動していく」と宣言。大槌町吉里吉里で一時避難所にもなった吉祥寺住職の高橋英悟さんは「津波で家を流された人と、建物が残っているものの何らかの被害を受けた人に対する支援の不公平感が顕著になってきている。この差を埋める活動をしていかねばならない」と指摘した。岩手自殺予防センターの藤原敏博さんは「陸前高田では、被災した商店を苦勞して再開はしたものの、継続できるかどうか不安が広がっている。仮設住宅で暮らす被災者の間にも『もう、いいんだ』という空気も出始めている」と懸念した。「支援ボランティアが足りないと言われながら、魅力的なテーマが見つかっていないという現実もある。今後は雇用が一番の課題に

なる」と黒住さん。「走るばかりで現実を見ていない自分に気が付いた。支援する側も限界にきている」と高橋さん。藤原さんは「それでも、悩んでいる人の思いをしっかりと受け止めることが生きる力になる」と前を向いた。シンポジウムを主催した蜘蛛の糸は、会社の経営に苦闘する中小企業経営者とその家族の命を救うことを目的に活動。震災後は釜石を中心に「いのちの総合相談会」を開くなどさまざまな支援活動を展開している。震災直後から毎月のように釜石に足を運んでいる佐藤理事長は「まだ何かできるはずだ」という気持ちを持ち続けることが大切だし、「今後被災地に足を運び、被災者の声に耳を傾けたい」と話した。